

工場の立地と移転にみる景観の意味づけの変化

Change in Meaning of Landscape Observed in Location and Relocation of Factories

香川雄一

KAGAWA Yuichi

①はじめに

②研究対象地域

③東京都東京市深川区の浅野セメントにみる工場景観

④神奈川県葉山郡逗子町の味の素にみる工場景観

⑤川崎臨海部における工場移転前後の景観変化と現在の景観の意味づけ

⑥まとめと課題

【論文要旨】

公害問題発生工場の立地と移転を通じて、研究対象地域における景観の意味づけを捉えなおした。日本において代表的な工業都市である川崎の臨海部は戦前から高度経済成長期にかけて工業地帯を形成してきた。結果的に工場が乱立する景観を構成していくのだが、工場立地当初は別の場所における公害問題発生工場が移転してきたという歴史的経緯を持つ。川崎が工業化を進めたのに対して、以前の工場立地場所である東京の深川と三浦半島の逗子はそれぞれ工場景観を消し去ってきた。深川は都心周辺部の居住地や業務地区さらに周囲には庭園を備えるように景観を転換させた。逗子は高級リゾート地と大衆観光地の両方で臨海部の景観資源を活用していく。工場の跡地がマリーナとして整備されたことにもその一端がうかがえる。

景観の意味づけが転換可能であるのならば、時代の転機によって工場景観を備えるようになった川崎にも工業化以前の景観資源を復活させる機運が残されている。公害裁判後の環境再生に向けた動きは、在来産業としての漁業に従事していた人々の海への思いを継承しつつ、東京湾臨海部に新たな土地利用と景観を生み出そうとしている。自然環境をいかした景観資源をとりもどす際に、活用可能である工業化以前の歴史を踏まえた経験を持つ漁業者の景観への意味づけは、物理的には存在しないもののいくつかの石碑によって確認できる。川崎が臨海部として工場立地の機能を充実化させてきたことは公害問題によって負の歴史遺産を積み重ねてきたことでもあった。しかし深川や逗子が完全なまでに公害問題発生工場の景観を消去してきたように、川崎においても過去の景観資源をとりもどし、新たな景観の意味づけを浮かび上がらせていくことが可能である。このことは景観政策において開発や産業に重きをおいた意味づけに再考を迫るとともに、今後の景観に関する議論の活性化につながるであろう。

【キーワード】 工場立地, 景観, 公害問題, 川崎, 深川, 逗子